

メキシコチャピngo自治大学 世界展開力長期派遣留学帰国報告

国際食料情報学部・国際バイオビジネス学科・4年・鈴木綾華

2016年八月から2017年六月末までメキシコのチャピngo自治大学に留学をしていた。

留学の理由としてはメキシコの文化や食など日本と違った点をこの目でみてみたいということが一番であった。また、英語以外の言語も身につけられたら自分の将来に向けての強みになるなど感じていたためでもあった。私の留学していたチャピngo自治大学はメキシコシティ空港から車で約40分ほどのテスココという町にあった。学校の敷地はとても広く、畑もたくさんあり、農業高校、大学としてはかなり整った環境であった。そういった情報もあまり知らないままほぼ無知の状態で行ってしまった私には、着いてからが毎日衝撃で驚くことばかりだった。ただその無知の状態がとてもいいスポンジとなり、メキシコの魅力を日々どんどんと吸収していった。

メキシコはとても広い国で地域によって全く文化が異なっており、特に興味深いものだった。

まず、メキシコはお祭りごとや行事が多く、家族との関係をととても大事にする国だった。学科の建物には独立記念日、死者の日、クリスマスなど、行事の度に違った飾りつけがされていた。どれも色使いが華やかだった。キリスト教の人がほとんどなので、その飾りつけや色使い一つ一つにもまた意味があってそこもおもしろい。

11月には死者の日があった。これは日本のお盆のようなものだがこれもまたかなり日本とは異なっており、シンプルに言ってしまうと、かなりカラフルで派手なお盆といった感じだった。飾りつけにはそれぞれ意味があり、オレンジの花は光、周りに飾る紙は風を意味していた。私の学科(DICEA)では各クラスが死者の日の祭壇をつくっており、学校内がかなり華やかだった。このように行事一つ一つをこの目で見て感じるができるのも留学の魅力であると思う。

また、メキシコの人たちは食べるのが大好きである。基本主食はトルティーヤで、トウモロコシは私たちが好んで食べる黄色のものよりは白いトウモロコシや、青や黒のトウモロコシの方がよく食べられている。トルティーヤといえばじゃあタコスしか食べないの？と思うかもしれないが、タコス以外にもメキシコにはおいしい料理が沢山ある。学食の食事は毎日違うメニューが出ているのだがそれも各州の伝統料理がでたりして、学食を食べているだけでも学ぶことが多かった。定番のタコスは日本で売っているタコスとは全くと言っていいほど異なるものだった。メキシコの本場のタコスは思っていたよりもシンプルで、小さめのトウモロコシでできたトルティーヤにお肉が乗っていてその上にお好みで、小さく刻まれた玉ねぎ、パクチーを乗せ、レモンをかけ、辛いのが平気ならそこに赤いサルサか緑のサルサをかけて食べるという料理だった。最初からがっつり味がついているというよりも、サルサとレモン、肉とトウモロコシの素材の味をそのまま味わえるという感じだった。もっとギトギトした料理が多いというイメージだったが、そんなことはほとんどなく食生活にはそんなに困ることはなかった。

留学期間は自分自身と向き合う時間がとても多かったような気がする。日本の外に出た時点で自分は外国人であるという状況に慣れるまで時間がかかった。そんなこと当たり前だし、わかっていたつもりだったが、「わ！アジア人だ！！」という感じでみられる周りからの視線が苦手だった。日本人ではなくアジア人としたくくりとして見られてしまうのも少し悔しかった。でも会話をしてみると大抵「え！！！日本人なの！？テクノロジーが進んでるよね！！」など興味をもって話をしてくれるのだった。自分は外国人であることを恥じていた。でも、それって特別なことだしもっと日本人であることに誇りをもって日本がどういう国なのか知らない人たちにもっと日本の事を知ってもらえるようにがんばろうかなと思うようになった。また、日本人が日本に来ている外国人に話しかけられても距離を置いて話してるシチュエーションよく見かけたことがあるのを思い出した。日本人だっておなじようなことを海外の人たちにしてしまいがちなら、自分はこのような経験を積んだ以上、そういう反応はしないようにしようとも思った。そんなことを考えていた矢先に、やはり出会いというのは不思議なもので、ある日家の外に出て学校に向かおうとしていたらお向かいに住んでいる見たことのなかった男性が声をかけてくれた。始めはどこから来たのかなど聞かれたことに答えていたのだが、私が日本人と分かった瞬間、その男性の顔がパーっと明るみ、「よかったら、僕の娘に日本語を教えてやってくれないかな？」と言われた。本当に言っているのか半信半疑だったが、「いいですよ。」といい、連絡先を交換した。後日連絡がきて、友達に「この人近所に住んでいるんだけど知ってる？」と聞くと、「あ！その人、前のチャピングの理事長だよ！！！」と言われた。何となく初めて会った時にそんなことを言っていたような気がしていたが確かではなかったのだが、その人は本当にチャピングの前の理事長をやっていた方だった。娘さんは12歳くらいの女の子で、アニメなどをきっかけに日本に興味をもったらしい。私の週一回の日本語レッスンは話をもらった二週間後に始まった。とにかく、教え込むというよりは日本語に楽しく触れてほしいという思いがあったので、すこしずつひらがなとカタカナを教え始めた。彼女は、「いつか日本にいきたいんだ」と話してくれた。「日本で2020年にオリンピックがあるんだよ！きっと盛り上がるから来たらいいんじゃない？」というキラキラした目で「じゃあそれまでに日本語をもっと勉強していきたい！」と言っていた。このように、日本に興味をもってくれている人たちは沢山いる。何となく以前よりも日本人でいることを誇りに思えたと共に、自分もそういった人たちとさらに関りを増やして手助けができたらとも思った。

三年生の一番日本での学生生活が楽しい時期に留学に行くのはもったいないなと迷ったこともあった。しかし、この選択が正しかったと強く感じている。自分が日本でいくら時間をかけても感じる事がなかった思い、知識が一か月一か月どんどん自分に向けてやってきて、それを自ら吸収して。その経験ができたことがこの留学の一番の収穫であると思う。また、留学に行かなければ出会えなかった沢山の人たちに会えることができた。何よりも、自分の家族、農大の先生方や友達、国際協力センターの方々、受け入れてくださったチャピング自治大学には本当に感謝をしなければならぬ。本当にありがとうございました。